
ティア

ルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ティア

【Nコード】

N7451W

【作者名】

ルト

【あらすじ】

小さな村のしきたりで、十年に一度、守り神に生贄を捧げている。生贄に選ばれたティアは、聖域の森を抜け、祭壇へ向かっている。

森の木々に阻まれた小さな空の向こうに、まるで大地がそこから傾いているかのような、巨大な山が見える。かつて戦乱があったとき、巨人があの場合に倒れこむことで戦争を止め、その亡骸が山になったのだという。

そんなわけあるか、と弟が言つて、ティアはびっくりした。なるほど確かに、それほど大きな巨人であるなら倒れずとも戦争は止められたはずだし、そもそも自分から倒れて死んでしまうというのも馬鹿らしい。

森の遙か向こうに巖と存在する山は黙して語らず、ただその威容を世界に誇る。

澄みきつた森の空気に溶け込むように素足が柔らかい土を踏み、ワンピースの裾が風をはらむ。その感触を肌で楽しみながら、ティアは目に鮮やかな緑を見渡した。

弟の言うことも分かるけれど、隣村とも滅多なことでは交流しない、小さな閉じた村でさえ、まことしやかに語られる伝説なのだ。それはきつと真実なのではないかなあ、とティアは漠然と考えている。

この閉じた小さな村にはしきたりがある。

十年に一度、生娘を森の奥にある祭壇に捧げなければならない。この生娘は、ひどく過酷なことに、独りで森を抜けて祭壇まで行き、十年分の手入れを行い、そのうえで身を捧げなければならないという。例外はなく、守らなければ村が滅ぶと言われている。

十年前、親しかった隣家のお姉さんが森に行つて二度と帰らないと聞いたときは、とても驚き、怒つて泣きわめいた。しかし、長老は、一切包み隠さず彼女が生け贄に捧げられることを、その意味を正しく理解するまで根気よく教えてくれた。当時まだ五年ほどしか生きていなかったティアに生き死にを語るというのも時期尚早だっ

たかもしれないが、少なくとも当時のティアがお姉さんを見送ることができたのは長老のお陰だ。そして、お姉さんが帰ってくることはなかった。

ティアの人生は、脳裏に焼き付いた、お姉さんが最後に振り返って手を振ってくれた、純白の麻で丁寧に作られたワンピースの裾が広がっているあのときの姿とともにあった。

今、ティアの身はそれに似た美しいワンピースが着飾られている。姉御肌のレベッカが身重を押して織ってくれたのだ。袖や襟首に丁寧にあしらわれた美しい刺繍は、生命を暗示する植物が描かれている。結婚式に使えるようなほど優美なこの服は、これっきりのティアに持たせるにはもったいない出来だ。記憶の中のお姉さんが纏うワンピースよりも綺麗だと誇りに思う。一方で、レベッカ自身の結婚式に使った晴れ着よりも美しい服であるのは、なんだか気後れする。背が頭ひとつ分も大きいレベッカが自ら着た方がよほど似合うに違いない。

しかし、それほどの衣装で自分を飾るのは初めてで、ティアは心が弾んでいることを自覚していた。似合ってなくとも森の中ならば見る人もいないし、思う存分服を楽しむことが出来る。レベッカも弟も似合っていると勢い込んで言ってくれたが、身内びいきであることは分かりきっていた。

弟は何にでも疑問を持つ変節な子で、年を重ねて周りの大人が答えなくなるにつれて考え込むことが増えていった。だんまりの子と言われて後ろ指を指されることもまれにある。ティアは弟可愛さにしてしばしば相手をしていたが、彼の持つ疑問の意味そのものが理解できないことが多かった。話について行く以前の問題だ。ティアはそんな弟を、村の誰よりも賢いと自慢に思っている。ティア自身が弟離れできておらず、そのせいで弟は今、十年前のティアと同じように、それ以上に、別離の辛さに苦しめられているはずだった。別れのときに目を赤く腫らしていた弟の姿が頭によぎる。胸が締め付けられるように痛む。出来ることなら、今すぐ帰って弟を抱き締めて

やりたかった。そしてじつくりと、かつて長老がティアにしてくれたように、ティア自らが生け贄となることを諭してやりたかった。聡明な弟にものを教えるなど出来る気がしなかったが、根気よく話せばきつと分かってくれると信じている。

ティアの頭には、生け贄の役目を捨てて逃げ出すという考えは欠片も存在していない。森の獣に襲われでもして果たせないことを恐れずらしていた。幸いにも、この森は守り神の聖域であり、獣が見られたことは一度たりとてない。その代わり、生け贄の娘以外は、誰も入ってはならないことになっている。

かつて、そう、一度だけ、こっそり森に入ったことがある。今のティアには信じられないが、当時のやんちゃ盛りだったティアは掟を破った。心のどこかで、お姉さんが生け贄に捧げられなければならなかったことを、根に持っていたのかもしれない。大人たちの目を盗んで入り込んだ聖域の森は、拍子抜けするほど普通の森で、いや、驚くほど安全な森だった。獣の気配はなく、植物が場所を分け合って、入り組むように繁茂していた。

その森をただ一本の獣道だけが、触れてはならない聖道のように土を露にしていた。その道をお姉さんが歩いたに違いなく、辿って行けば祭壇が見つかるはずだ。祭壇に行けば、あるいはお姉さんの遺体が見つかるかもしれない。そう考えたのだ。それは、お姉さんの死を受け入れるための儀式のつもりだった。

しかし、道は余りにも安全すぎた。本当に順調に、このまま行けば間違いなく祭壇にたどり着くだろうと悟ったとたん、ものすごく恐ろしくなった。

掟を破って祭壇を見たら、どうなるだろう。守り神に祟られて死ぬかもしれない。それだけならばまだ、自業自得なだけマシだ。守り神が怒って村の守護をやめてしまうかもしれない。魔物が襲ってくれば、村人は残らず取り殺されてしまうだろう。あるいは、守り神自身が村人を残らず祟り殺してしまうのではないか。古い恐ろしい伝承のように、人に化ける魔物に入り込まれ、互いに信用できな

くなつた拳げ句、村人同士で殺し合う末期を辿ってしまったら、真に報われない。そして掟を破る以上、それが実現してもおかしくはない。他ならぬ、自らの行いに対する報いなのだから。そうなつてしまえば、村が壊れてしまえば、命を懸けて村を守つた少女たちやお姉さんの意思も命も、すべて無下にしてしまふ。無意味だつたことにしてしまふ。どうしよう。お姉さんが命を投げ出してまで守つた村を、この一步が踏みにじっているのだ。一足ごとに村が壊れていくのだ。いや、すでに村は焼き尽くされて残っていないかもしれない。帰つたティアを迎えるのは愛しい人の死体だけかもしれない。罰としてこれ以上のものはないだろう。

生け贄として捧げられた少女たちの歩んだ道を汚しているかのようで、怖くて悲しくて、いつの間にかぼろぼろと泣きながら森の前まで逃げ帰っていた。

村は、まったく同じ姿でそこにあつた。

ティアは長老から罰を受け、二日間、一睡も許されず森の入り口を清掃させられた。幻覚すら見た危険な体験だったが、その辛さと引き換えに赦され、ティアは涙して喜んだ。

お姉さんの行いを無に返さずに済んだ。ティアが過ちを犯したにも関わらず、村は何事もないことが保証されたのだ。喜ばずにはいられなかった。

長老は同情と共感で口先の許しを与えようとした村人を制し、思いを同じくしているがために自らも涙を流しながら、幼い子供に過酷すぎるほどの罰を下した。ティアは長老を恨むどころか心から尊敬している。あの贖罪がなければ、ティアの人生は罰の恐怖と罪悪感に埋め尽くされながら歩むものになつていたはずだ。

風を踏むような足取りで森を進む。

死ぬのが怖くないわけはなかった。しかし、ティアは彼女が知り彼女が望む世界が壊れることこそを恐れていた。ティアの人生は、幸せであつたと確信している。だからこそ、手間暇掛けて育て上げた鶏を絞めるように、自分の命を村に還元することもまた、当然の

ことだと思っていた。

そうすることが絶対の正義であると証明するかのうちに、穏やかに過ぎる死への道を歩む。

まっさらな裾をひらひらと翻しながら。

深く入り組んだ森を歩き、日が遠く空が赤らんだころ。ティアは小さな祠と大きな社を見つけた。くつきりと続いていた細い道はここで途切れ、細々とした雑草が、葉を揺らしている。苔むして湿つたような祠の組み木は、不思議と腐食しておらず、静けさと穏やかさを宿して木陰に揺れていた。

「ここ、かな」

ティアは不安げに顔を曇らせ、顔を巡らせる。人も鳥も虫さえいない。木のさざめきだけが囲っている空間は、聖域を証明するかのように、木漏れ日に白んで輝いていた。

意を決したようにティアは拳を握り、社に向かった。静かな木の温かさを持つ社は、どつしりとした存在感でティアを迎える。祠同様、腐食したところはひとつもないが、こちらは日の当たらない部分が苔むしていた。壁に雑草の蔓が走っている。

表の階段にも草が積もっている。ティアがそつと足を乗せても、小さく軋みをあげるだけで、見た目以上に頑丈な弾力と張りがあった。ゆつくりと階段を登り、恐る恐る格子の入った板戸に手をかける。敷居に引つ掛かってガタガタと揺れるが、外れる気配もなく板戸は開いた。砂と埃の臭いがむわりと顔をなぶる。

社の屋内は広々としていた。人が住んでいる気配はなく、家財の一切も置いていない。初めから、物が置かれたこともないのかもしれない。床にまんべんなく埃が溜まり、床板は不自然な傷みがなかった。

ただ唯一、奥の壁に、小さな戸棚が据え付けてある。髪留めなど小物を入れたら、それだけでいっぱいになりそうな引き出しと、その上の小さな戸。ティアにすら一抱えで持ててしまいそうだ。

ここに来てティアは困惑した。見るからにあの戸棚には、雑巾やたわしのひとつも入っていないさそうである。掃除用具がなければ掃

除のしようがない。

「こつち」

ティアは飛び上がった。振り返り、首を巡らす。先ほどと同じ祠が背を向けていて雑木と雑草が揺れているだけだ。人の姿は見えない。

「こつち」

何べんも確認して、ようやく声がどうやら社の左手から聞こえるらしいと気がついて、そろそろと社を出た。

社の左側にかかる日陰に、女性が立っていた。彼女の横に笹を結った簾が立て掛けてあり、その頭から竹簾の柄が突き出ている。

ティアはそう気がつきつつも、黙って佇んでいる女性を見つめて固まっていた。女性は静かにそれ以上何も言わず、黙って木陰の向こうに行ってしまう。

姿が見えなくなつてたつぷり待つてから、ようやくティアは動き出した。女性の消えた木立を見つめながら、慎重に簾をまくる。

痛んではいるが充分使えそうな箒や桶、たわしが並べられている。それらの具合を確かめて、ようやく木立にもどこにも女性の姿がないことに気がついた。

それでも、ティアは向こう十年村暮らしをして来た一端の娘である。汚れの程度こそひどいが、掃除はティアの大事な仕事のひとつだ。そして無心に腕を動かすことこそ、ティアの得意とすることであり、ふとたわしでこする手を止めて水を流してみれば、そこには残らず泥をこそぎ落とされ、見違えるほど木目の美しくなった祠の屋根が立ち現れてくるのだ。ティアは己の仕事に満足そうに笑顔を綻ばせると、より活力を増した手で祠の中を擦り始める。

ティアは昔から掃除が好きだったわけではない。殺しと盗みに続く禁忌を破る程度にはお転婆だった彼女は、当然のように家の手伝いなど知らぬがとき有り様だった。唯一手伝った川からの水汲みと弟の世話も、決して万全ではなかった。こればかりは、かつての

隣のお姉さんがたしなめても聞かなかった。野山を駆け巡るのが、特に木を登るのが好きだったのである。木と土の臭いを体からぷんぷん匂わせて、汗だくの体で風を受けるときは、自分が大きな世界と一体になったような、奇妙な高揚を感じるのだ。

もちろんティアとて弟は好きだ。体を動かすのを億劫がつてすぐずるのには煩わしさを覚えたこともあったが、それはティアの宝物を弟にも分けようとした上での結果であるし、村の中で弟を蔑ろにしたことはなかった。幼い頃から弟は学童だったのだ。

そんなティアが最初に掃除に取りつかれたのは、お姉さんがいなくなつて数年が過ぎたころ、季節が巡ることの感動が薄らいできたころだ。弟が出来すぎた子だったのである。ティアがやるべき仕事の何もかもを、弟がやってしまったのだ。知らぬうちに家の全てが完了して作られた食卓を前に、ティアは初めて、自らの土の臭いを恨めしく感じた。お姉さんが聖域に消えていく背中を思い出して、胸が詰まつて夕食が喉を通らなかった。ティアが初めて掃除に手を染めたのは、その翌日である。家族みんなが驚き喜んだ。ティアが森を走っている間の弟を、レベツカが見ていたと初めて知つた。そして、ティアの大事な仕事に掃除が加わり、土の臭いは畑の臭いにすり変わったのだ。

泥を擦り落とした木目の美しいことを発見するのに、それほど時は要さなかった。土と風の快感は、営活の快感に取つて変わった。今、村の娘子にレベツカと並びお姉さんと呼ばれるたびに、ティアは恥じらいと可笑しみを混ぜた苦笑を感じる。

幾度目か知らぬ桶の水汲みを終えて、祠の掃除を大方終えたティアは、辺りが暗くなっていることに気がついた。

「お腹空いたなあ」

赤らんだ空と陰の濃い枝葉の境目を見つめて呟く。自らの言葉に背筋を凍らせた。食料がない。水はある。社と雑草が広がる土を見渡して、ティアは絶望的な気分になった。

「お疲れ様」

疲れきっていたティアは飛び上がれなかった。

背後に、掃除用具の場所を教えてくれた女性が立っている。長い髪が顔に掛かり、暗い表情を陰に隠している。枝のような腕に気だるそうに兎と果実を吊り下げている。持っているのも辛いのか、捨てるように投げ落とす。

「今は、掃除のことだけ考えなさい」

かすれた声で呟いて、ティアを見つめ、やがて背を向けて森に消えた。ティアは凍りついたようにその姿を見送る。

怪我をした兎が這いずる乾いた音が響いている。

村の娘であるティアは、鶏を絞めるのはよく手伝っているし、たまに自分ですべて行うこともある。しかし兎を絞めたことはまだなかった。獣は男たちが狩りをして持ち帰る。そのなかで兎だけは、商人が吊り下げるものしか見たことがなかった。

仮にここで捌いたところで、火も起こせない。着火材がないのだ。そもそもティアは生け贄として森に入った時点で、命はすでにティアのものではない。その自分が他の命を奪ってまで生き長らえることは、気が咎めた。

兎の毛が赤く染まっている。ティアは辺りの木立を見渡して、そつとスカートの裾をめくった。

「……ちよつとだけなら、分らないよね」

裏の生地を裂いて、兎の足の傷を縛った。大した治療にはならないが、最低限止血にはなるはずだ。

びっこを引いて、兎は草葉の陰に逃げていった。その尻尾を寂しそうに見送って、ティアは半開きの手のひらを振る。

果物は酸っぱく、繊維の味しかなかった。

翌朝、ティアは寒さで目が覚めた。布団を探り、何もないことを思い出して頼りなさとし心細さが胸を占めて、そこで身の上を思い出す。

暗かった。

まだ日の出前だ。慌てて軽く掃除したのは社の軒先だけで、朝霧を含んだ風が吹き込んでいる。

ティアは身を起こした。掃除もしない頃から朝だけは早かった。ティアは、村一番に川まで水汲みに行くのが日課だ。水甕がいっぱいになるまでの三往復。終わる頃には家族みんなが起き出している。しかし今日ばかりは、いやもう二度とその責務はないのだ、と思うと、胸が詰まってどうしようもなくなり、戸口から隙間風が吹き込んでくるのが耐えきれなくなって、表に飛び出した。

外はまだ暗かったが、空の端がわずかに白んでいる。枝葉と夜空の境目をじっと見つめて、むずむずと痒い首筋を掻いた。ポツリと指先に微かな感触。虫に食われた、とティアはぼんやり首を傾ける。朝の澄んだ空気で深呼吸し、井戸に向かった。水を汲み上げて半分を桶に注ぎ、手と顔を洗い、残したぶんで口をゆすいで、喉を潤す。濡れた顔のまま、古びているのに不気味に整った社を見上げる。弟は伝承にはまっていた時期がある。長老ら老人たちのもとに通い詰め、村に残る説話のすべてを聞き修めた。それだけでなく、商人からも伝え聞いたことのある伝承や説話の数々を聞き出した。ティアは弟の無限とも思える昔話の数々を、村の子どもたちと一緒に聞き入ったものだ。そのなかに、生け贄の慣習に関わることは数多く存在した。

それでも、森に入った生け贄のその後は、一度も語られたことがない。

祠の前に果物が落ちていた。例の女性が残っていたものだろう。ティアは首をかしげながらもどこぞに向かって頭を下げて、ありがたく頂く。社を磨くという大仕事に、空腹を抱えた体で取りかかることは到底できなかった。先にティアが持たない。とはいえ、この日は先に雑草を抜くことにした。祠を綺麗に磨く前にやっておけばよかったと後悔したが、だからどうなるわけではないし、やらないわけにはいかないのだった。

朝から暑くなるまで続け、正午を過ぎた辺りでティアの手足が限界を迎えた。絡まり合う根っこを慎重にえぐり出し続けた指は節が曲がらなくなり、腕や膝は痺れるように固まって動かすだけで震える。体の芯から疲弊しているような、震えるような疲れが腰に凝り固まっていた。余りにも疲れて、高く上った日に照らされた蒸し暑さも手伝って、社に転がって体を休めた。日陰とすきま風が、わずかばかりの涼気を提供してくれる。ティアは正体なく眠り込んだ。

目が覚めた頃には日が少しずつ遠くなり、空はすでに午前中の白々としたまぶしさを失っている。

ティアはむくりと起き上がって、ぼんやりとした頭で表を見渡した。三分の一ほど土が露出し、依然として雑草の繁茂する境内。目が冴えてきたティアは自分の両手を見下ろして、指を一本ずつ確かめた。曲げるときにかすかに筋が軋むような痛みはあるが、充分休まっている。ティアは社の前にまた果物が投げ出されていることに気がついた。お昼を食べていないので、ティアはまた空腹になっている。顔も知らぬ誰かに頼りきる不安をこらえて、ありがたく食べた。井戸に寄って水を飲み顔を洗って、それから続きに取りかかる。夜が来ても終わらなかった。

山と積み上げられた雑草の青臭い埃っぽさを振り払って、ため息を吐く。

「なんで食べなかったの」

ティアは飛び上がった。疲れた足腰が体を支えられず、そのまま雑草の山に沈む。

いつもの陰鬱な女性だ。また兎を吊り下げている。左手には果物と、加えて、豆。

「勝手に死なれては困る」

「……」

ティアは口を開いたが、怯えが喉を詰まらせて声がでない。

女性はティアを黙って見下ろしている。おもむろに兎の首を親指で捻った。梟のように抵抗なく回る。ひっ、とティアが息を呑むのも構わず、女性は兎の首を口に添えた。

びくん、と兎の右後ろ足が跳ねる。

歯で噛み切ったのだ。首が回っても兎は生きているようだったが、もはや微動だにしない。兎の顔が溢れる血に染まっていく。その濡れた瞳は、まるで縫い付けられた石英のようで、飾り物めいていた。「あとは自分でやりなさい」

べっ、と毛と肉片を吐き捨てた女性は、ティアに血みどろの兎を突きつける。凍りついた目で女性を見上げ、震える口を動かした。

「鉈が……ありません」

首を切るにも骨を断つにも、鉈がなければ難しい。しかし、純粹に意外そうな瞳でティアを見る女性に怯んだ。彼女は口が真っ赤に濡れている。彼女のように歯でやれと言われては堪ったものではない。ティアは慌てて言葉を加えた。

「それに火が起こせないんです。内蔵も取り除けない野生の生肉なんて、危なくて食べられません」

しばらく黙ってティアを見ていた女性は、ぽつりとつぶやく。

「そういえばそうね」

ティアは面食らった。思いがけない素直な反応に戸惑う。困惑の視線の先で、女性が困ったようにキョロキョロとしていた。

「参ったわね、気づかなかったわ。火は私が起こせるけど、えっと、どうしましょう」

「薪を、集めましょう」

女性は目を留めて不思議そうに目を瞬いた。

「自分で集めてきなさい。集まったら呼びなさい、行くから」

「え。呼ぶって、あの」

聞こえないはずはないのに、女性は知らぬ顔で歩き去ろうとする。いろいろと聞きたいことはあったが、とにかく聞かなければならぬことを尋ねた。

「名前はなんとおっしゃるのですか？」

実は本当に聞こえてないのかもしれない。背中に何も変化が見られない。ティアが大きい声で繰り返そうと息を吸った途端、突然びたりと歩みが止まった。振り返って、不思議そうな顔でティアを見つめる。

「フレリス」

短く告げて、フレリスはまた、何事もなかったかのように歩き去っていく。

さしもの村娘も、焚き火の竈を日常的に作るわけではない。村に大きな竈を作り置くのだ。しかしティアは、その点普通ではなかった。あまりにも森で過ごすことが多かったために、心配した長老が、万一遭難してもいいようにとサバイバルを手解きしてくれたのだ。ティアはその知識を十全に学び、理解し、悠々と無断外泊を決行した。年を重ねて村に落ち着いた今になって、その技術を再び活用する時が来るなど、夢にも思ったことはない。ティアは記憶をたどりながら、薪になりそうな枯れ木を探る。口許に笑みさえ浮かべていた。ややもすると石を積んで囲い、木が崩れないよう支え合わせて組んだ竈が完成する。ティアは己の仕事に満足するようにならずくと、振り返って声をあげた。

「フレリスさん、できました！」

背中で焚き火の爆ぜる音。

体を戻した目前に、膝を抱えたフレリスが竈の焚き火を見つめている。驚いて声をあげたティアを見上げ、フレリスが尋ねた。

「これでいい？」

「あ、はい。えっと、あれ？」

そういえば兎肉はフレリスが持ったままどこかに行ってしまったのだ、と思い出して、フレリスを見る。彼女は首と落とし皮を剥いで、腹を切り開き内蔵を取り除いた兎肉を握っている。どうやって処理をしたのか、と聞こうとして、やめた。ティアは黙って兎肉を預かり、水で血を洗い流して、雑草にまぎれていた香り草を腹に詰め、焚き火の上に差し渡す棒に足を結いつける。

焚き火の上に肉を置いて、ティアはちらりとフレリスをうかがう。フレリスは膝を抱えたまま、放心したように焚き火を見つめていた。肉に塗りつける辛味の強い木の実を尋ねようとして、諦めた。兎肉はじりじりと炙られて煙でいぶされる。薪のはぜる音が繰り返され、ティアは時折、火に当って乾かした薪を追加する。そんなことを繰り返す間に、すっかり夜になっていた。空は暗く森は黒く、焚き火の明かりに照らされて濃密さを増した陰は、壁のようにも無限の穴のようにも見える。

「焼けましたよ」

熱を帯びてカラカラに乾いた棒を慎重に持ち、ティアはフレリスに告げた。ぼんやりと他人事のように肉を眺めている彼女の顔は、美しく均衡が取れていて、まとまっており、まるで誰かによってあるべき形を定められているかのような。フレリスの赤みがかった黒い瞳が、ふとティアの顔に焦点を合わせる。

「私は食べられないわ」

「私も一人では食べられません。どうぞ、分けあって食べましょう」
「いいえ。私は物を食べられないの。お腹を壊してしまう」

ティアはきょとんとしてフレリスを見た。フレリスはティアの目を見つめて、首を振る。少しの間をおいて、ティアは兎肉にかじりついた。ブチブチと筋と皮を腕と顎で引きちぎる。フレリスが失笑した。

「野生的ね」

食いちぎった肉を咀嚼しながらティアが小首をかしげ、己の行い

を指していると気づいて顔を赤らめた。

「これはその、食器も何もないものですから」

「いいの、気にしないで。食べなさい」

恐縮しながらも、また肉に歯を立てる。昨日は果物しか食べていないティアの食欲は、なかなか旺盛だった。フレリスが黙ってしまい、また固く筋ばった兎肉と格闘するのに必死なティアはしばらく会話が絶えた。足までしつかり食べ尽くしたティアは、手と口をゆすぎ水を飲み干して、やっと人心地ついた。

「フレリスさん」

「なに？」

フレリスは眠そうに答える。膝に頬をつけて、火勢の弱まった焚き火を見つめている。

「あなたが守り神ですよね」

「そうね」

呆気ないほど簡素な返事に、ティアは淡白にうなずいた。

「私は、どうなるのですか？」

「大丈夫、痛くはないから」

「社の掃除が終わったら、私はあなたに殺されるのですか？」

「そうね。逃げちゃダメよ」

「逃げませんよ」

フレリスは顔をあげた。ティアは食べかすの骨がとろとろとした埋め火に焼かれていくのを見つめている。

翌日、夜明けと同時に目を覚ましたティアは、身を起こして社からの景色を眺めた。フレリスの姿はない。ただ社の正面に作られた竈に、煤とわずかに焦げ付いた兎の骨が残っている。

ティアは朝から雑草取りの続きを行った。午睡を経て山と積まれた雑草は、ティアの胸ほどもでの高さがある。

すでに空が赤らんでいた。薪を集め、竈の煤を掃除し改めて整える。祠を軽く掃除し、また社の寢床となる辺りを掃き清める。そんなことをしている間に夜を迎えた。

フレリスはどこから猪の子を捕まえてきていた。すでに解体処理を済ませていて、ティアは初め首を落とした赤子が勘違いして焦った。

「猪の肉はクセが強いから、穀醬で煮詰めないと食べられたものじゃないんだったわよね」

鍋まで持ってきたフレリスは、ティアに笑みを見せる。

「少し思い出してきたわ。確か牡丹鍋って言うんだったわよね」

そのどこか楽しそうな様子に、ティアは少し驚いていた。遅れ気味に返答する。

「ええ、はい。よくご存知ですね。やっぱり食べられたんじゃないですか？」

「いいえ。でも、よく作ってあげていたわ」

鍋を眺めていたフレリスの笑みが、突然凍りついた。

聞き返そうとしたティアが口を開く前に、フレリスは鍋を投げ捨てる。肩をすくませて、ティアは打ち捨てられた鍋を見る。側面に石に当たったらしく、へこんでいた。

「材料はあるんだから、もういいわね。ちゃんと食べて体力をつけなさい」

冷たい声で言い捨てて、フレリスは去っていく。ティアは一声も

発さず、身じろぎ一つせず、その背中を見送った。猪肉と鍋、大葉に包まれた穀醬がかまどの周りに散らばっている。臭味取りの香味野菜が足りない、と伝えることは、もうできない。

また日が昇った。祠に果物が転がっているのを見て、ティアはため息を吐いた。ぼんやりとした表情で空を見上げる。

この場所での寝食に慣れてきていた。今日はどこを掃除するべきか、と考えて、ティアはごろんと寝転がる。

「なんのために、ここにいるんだろう」

生贄とは、何のことだったのだろうか。掃除が終われば、フレリスに殺される。そうなのだろうか。そうだとすると、村は守られるのだろうか。ただ掃除をするために、村から寄越されているわけではないはずだ。脳裏に、幼い日に見た森の姿が浮かぶ。静謐で、深遠で、途方もなく恐ろしかった、お姉さんを飲み込んだ暗い暗い道の向こう。あのころに想像していた、洞窟と、奥の祭壇と。

お姉さんの穏やかな死相。

きつとそうなんだろう、と願っていた。自分もそうなるのだろうか、と信じていた。だからティアは、生贄になることを恐れなかった。

恐れる必要がなかった。お姉さんがやり遂げた、村のために不可欠な仕事を、自分もまた担うことができるのだから。けれど、実際は、ただ荒れた社を整えるだけだ。食べ物とは与えられ、雨風も防げる環境で、何日も働く。その仕事はまるで、村に居たところと同じように、さらに蓋を開けてみれば、守り神と信じていたものは、人を忘れた人だった。生贄として命を賭して、それで、本当に報われるのだろうか。ティアが村を出るときに願った、村人の幸いは、叶えられるのだろうか。お姉さんも、本当にこんな仕事を行っていたのだろうか。生贄とは、いったい何のためのものだったのだろうか。

今は、少し、怖い。

「ああ、もう！ ダメダメ、早くやっちゃおう」

ティアは声に出して思考を振り払った。立ち上がる。

瞬間、目蓋を閉じたかのように視界が暗くなり、平衡感覚を失って体が傾いた。戸口に半ば体当たりをして体を支える。視界に明るさが戻って、改めて自分が目蓋を開けたままだったことを確認した。立ちくらみだ。

「あれ……疲れたのかな」

まさか、とティアは自ら否定した。普段より夜が早いくらいで、村暮らしより厳しい要素はひとつもない。

ポリポリと指先で首筋を搔き、間抜けに開いた口を閉じて自分の体を見下ろす。ちゃんと立てることを確認して、ティアは息を吐いた。

「よし、やらなきゃ」

ぐつ、と手を握る。今日は、屋根の泥をこそぎ落とす。

梯子を持って屋根に上がる。地面が遠くなり、目線が高くなる。雑草がひとつもない、均された地面が日を照り返している。土を焼いて作った石……瓦で葺いた屋根によじ登り、ティアは微笑んだ。木のヘラを握る。瓦の間に詰まった泥を削ぎ取り、捨てていく。また見えるところは一つずつ丁寧に磨いた。屋根の縁から身を半分も乗り出して、腕を伸ばし瓦の裏に手を入れる。

ティアに高所の恐怖は無縁だった。森の子であったティアは、高所の不安定を御す方法に精通している。むしろ不安定を制御することに喜びさえ感じた。木を登り、登りきり、あまつさえ、しなる枝を伝って隣の木に乗り移ったときの、胸をすくような快感は、無上のものだ。親や長老には叱られた。弟にすら、たしなめられた。それでもティアは、木に登ることをやめなかった。木が好きだったのだ。木肌の触りも、うろに指をかける重みも、足に感じる枝振りも、しなうって揺れる柔らかさも、ティアには奥ゆかしく好ましい。とりわけ日に照らされた幹に抱きついたときの、じんわりとした温もりは、何にも代えがたかった。そうして家財と仕事をなげうって、木とともに育ってきた。

報いを受けた。

ティアはあるときから急に、木の上が居心地悪く感じられた。枝振りが狭く、身を屈めなければ座れない。枝のしなりが悪く、揺れを感じない。うろに手をかけると、木の肌が剥がれてしまった。それでもティアは、木の上の心地よさを満喫するつもりで、抱きつくようにしてよじ登った。

叩き落とされたのだ。

覚えているのは、枝葉を叩くバサバサという轟音と、足を掬われて体が回転し、視界に入ってきた空だ。

しばらくは、森にも行けなかった。腕に打ち身が残り、怪我を診てもらうときに、長老に教えられたのだ。大きく育ったティアの重みは、木には負担であつた、支えきれなくなってしまったのだ、と。決して見捨てたわけではない、それがために軽い怪我で済んだらうと。

無垢な暴力の報いではなかった。ティアが木を好きなことは、木も喜んでいるに違いなかった。ティアはまた森に足を運ぶようになった。もう無理に木に登ることはなくなった。お互い傷つかないために。

ティアは日に炙られて熱を持った瓦から、体を離れた。いつの間にか、日が高い。よく照つて、見映えよく輝いている。その眩しさに目がくらんだ。傾いた足元の不安定が、突然波打つ。ティアは慣れた感覚通り、熱い瓦を踏んで体を整えた。にもかかわらず、ティアのひどく狭まった景色では、地面が大きく回り込んで目の前に迫ってきている。

ティアの弟は博識だった。村の逸話を学び、長老の甥が持っている書庫を当たり、暇がある限り思索に耽った。それでも分からないことがあるくらい、世界は深くて広い。

死後の世界というものは、いくら聞いても分からなかった。他の村より遠い場所など、分からないことはいくらかもあったが、死後の世界だけは、また別の分からなさなのだ。逸話だけなら、たくさんあった。雲が死者の家なのだという逸話があった。傲慢な金持ちは大い家に住むが、絶えず雨を降らせて家が削れて、いつか足元に穴が開くかと怯えて暮らしているという。小さな雲は、他人を妬み嫉む、心の狭いものが住むという。薄い雲は動物と子どもが幸せに駆け暮らしているという。罪人が空から投げたされたとき、稲光が光るのだ。ティアは何度も目を凝らしてみたが、ほんの二度ほど、何かの姿を雲間に見つけたことがある。また山の向こうには、死者の住む黄金の国があるという。そこでは苗を植えれば畑となり、ひとりでに育ち、豊かに実らせる。山の中にも死者がいるらしい。地下深くにまで続き、エリカディアンのに、豊かに歌い暮らしているという。

どれが真か、分からない。死後の世界を弟は、もしかしたら存在しないかもしれない、とすら言っていた。ティアはそんなはずはないと思っている。死者の遺体は野焼きして、灰を川に流すのだ。だから死後の世界がなければ、弾かれものになってしまう。暮らがつらく、たいへん困ったことになる。

ティアは目を覚まして一番に、抱きつかれているのかと思った。肩に手を乗せられて、頬をすり寄せられている。しかし、首筋を液体が流れる感触を覚えて、違うことを悟った。

「フレリスさん」

フレリスはティアの体から顔を離して身を起こす。その血色はほ

の白いものの健康的で、食事を欠いているとはとても思えない。

「起きたのね」

「はい」

ティアは起き上がろうとしたが、体が重かった。体の芯の方が寒く、頭がくらくらとしている。

「無理をしないで」

フレリスがティアの肩を押さえた。横になったまま辺りを見る。

薄暗く、戸口から土の臭いがする。天井の梁は、そろそろ見慣れたものだ。社の中だった。

「無理をして、勝手に死なれては、困る」

フレリスは怒っているようだった。ティアはフレリスを見上げる。

「あなたが、助けてくれたのですか」

「そうね」

「そうですか」

ティアは目を伏せて、首筋に指を添える。痛みはないが、血で濡れていた。

「あなたは、血を吸うのですね」

「ええ」

「それで、物が食べられなかったのですね。ひとが遣わされていたのも、このためですか」

「私が頼んだわけではないわ」

フレリスは表情に乏しい顔で、ティアを見下ろしている。その口の端が、目の色が、かすかな笑みを匂わせた。

「寄越されたものは、ありがたく使っているけれど」

ティアは体を起こした。フレリスの手を振り払って、立ち上がる。貧血で目がくらんだ。足がふらつき、まっすぐ立てない。影に塗りつぶされた視界で、フレリスがいるとおぼしき方を向いて、声を出す。

「みんな、必死なんです。子を、家族を、たくさんの仲間を守るために。大切な人を守るために」

「それであなたが差し出されるの？」

「私も必死だからです」

フレリスの表情が変わった。意識がもうろうとしているティアは気づかない。

「私も、みんなを、大切な人を守りたい。だから、私は、ここにいます。あなたに馬鹿にされたくない。あなたにこそ、馬鹿にしてもらっては困ります！」

「私が、あなたの気持ちを理解することは、ないわ」

フレリスが強い口調で言った。めまいが治まってきた視界のなかで、フレリスは静かに座っている。ティアを哀れむように、それ以上に羨むように、微笑んでいた。

「でも、きつとあなたの望むようになる。これまでのように、これからも変わらない。変えたりしないわ」

ティアは立っているのもつらく、しゃがみこんだ。フレリスは手助けもしない。ただ掃除の進展を見て、ティアに告げた。

「今日は休みなさい。よく食べてよく寝ることね」

彼女が社を出ると、怯えたような動物の鼻息が聞こえた。鹿だった。四肢を折られて転がされている。ティアは膝をついたまま、頭を抱えた。命を軽んじた略取の、片棒を担がされているような気がした。

翌朝になっていた。

鹿は食べていない。四肢を折られたまま、軒先で芋虫のように這いずっている。目から腐れた膿を流していた。

薪として使う太い枝はある。それなりに重く、握りも悪くない。長さもちょうどいい。ティアは鹿から目を逸らした。

なにも口にしないまま眠ったので、芯から痺れるように重い空腹が、ティアの中心にぶら下がっている。祠にはやはり果物が転がっていた。割って、鹿の頭の前に置く。興奮した鹿が、息を荒げて涎まみれの頭を振り回した。ティアは慌てて逃げる。いくらティアで

も大型の獣と接したことはない。鹿は腐臭がしていた。

見てもらえない。ティアは社の階段に腰を下ろす。惨めな顔で、ティアは果物を口に押し込んだ。瑞々しい繊維の味がした。

あとは社の建家を洗い、屋内を掃除すれば終わりだ。

ティアはすぐに取り掛かった。屋根を払い、庇を拭い、壁を磨く。取りつかれたように、あるいはそれ以外のすべてを取り落としたかのように、ティアは掃除に没頭した。

鹿は果物を食べなかった。

村において、掃除には意味が伝えられている。日々積み重なっていく悪気を清めることだ。不運は高きから降るために、難しいから天井の梁に埃を溜めるのは悪徳だった。しかし、積み重なる以上に掃除をすると、居着いた運氣さえ掃き出してしまうと、また別の悪徳とされた。村の間では、ほどよく掃除好きな女性こそ、良妻と言われている。ティアはしばしば、掃除のしすぎを止められた。

掃除に手加減を求められたが、世の常として、例外が存在する。死別したときや、重い篤い病床に伏したときは、思いっきりきれいに掃除するのがよかった。運氣にも相性があり、それは家に在る普段の生命力に依拠する。そのため、その定量が崩れたときは必ず掃除を徹底する必要があるのだ。

ティアも幾度か、そのような掃除を手伝った。かつて生け贄となったお姉さんの家も、そのなかに含まれている。

「まだやってるとは思わなかったわ」

一心不乱に縁の下を磨いて、掃除に取り組んでいたティアは、はたりと呆けたように顔をあげた。フレリスが立っている。いつも通り、長い髪に沈鬱な表情を沈めていた。ティアは手が痺れるように疲れていることに、初めて気がついた。不思議そうにその手を見下ろして、ティアは口を開く。

「聞いてもいいですか」

「ええ」

見上げたフレリスの顔は、情感が薄く、沈鬱で、何もかもを嫌っているふうですらある。

「あなたはなぜ、村を守っているのですか？」

ティアは立ち上がった。フレリスの背は高い。目を見るには少し見上げなければならなかったが、ちょうど長い髪の間から覗き込む形になった。

「あなたは、人の命をなんとも思っていないせん。村人のことなんて、どうでもいいと思っっているでしょう。なのに、なんで、生け贄を受け続けているのですか？ 村を守っているのですか？」

フレリスの表情は動かなかった。彼女は社に背をつけて寄りかかる。

「確かに私は、村人が生きようが死のうが、どうでもいい。ただ魔物が領域に入るのを防ぐだけ。私は最初から、村なんて守っていない」

フレリスは空を見上げて、誰の姿も見ずに、言った。

「私は、私が愛する人と交わした約束を、守っているだけ」

「どんな約束ですか？」

ティアは聞いてから、しまった、と顔を歪めた。立ち入ったことを聞いてしまったと思った。フレリスはティアを見ないまま、皮肉

げに笑って、口を震わせる。

「生きて、村を守ってやってくれ。恨まないでやってくれ。そうして、幸せになつてくれ。……馬鹿を言うわ。勝手に死んだくせに、置いていったくせに……幸せになんて、無理に、決まってるのに」
ティアは顔を伏せる。フレリスを見るべきではないと感じた。しかし、疑問の言葉を次ぐ。

「いつから、守っているんですか？」

「さあ。五百年は経ったと思うけど、正直覚えてないわ」

ティアは息を呑んだ。フレリスは自らを切りつけるような、自虐的な声で、表情だけは愉快そうに笑う。

「美しい感傷でやっていられたのは、最初の十年だけよ。飢え死にしそうになって、守れて言われた村人をさらって……あとは、呪わしく流れる年を数えるだけだった」

ズルズルと壁につけた背中を滑らせて、フレリスは座り込む。

「いつからか、どうせ村人がいなくなるなら、って捧げられるようになって……守り神とか呼ばれはじめて……あんたがいるわけ」

フレリスは膝に肘を当てて頬杖をつく。その顔は微笑を浮かべた。
「守り神なんて滑稽ね。私は血生臭く、近寄る魔物を殺して回るしか、できないのに。そんな都合のいい神様がいたら……どんなに、よかったか」

隣で聞くティアは、言葉を失って立ち尽くす。足元で早くも芽を出した雑草の、細い葉を見つめていた。

「それでも、守るんですか？」

フレリスは小さく笑った。事も無げにうなずく。

「ええ。約束だからね」

「私は」

ティアは口を開いていた。自覚すらないまま、思いが言葉になっているかも不確かなまま、ただ喉は意味ある声を紡いだ。

「私なら、そんな約束は取り消しです。やめにします。だって、」
その瞬間にティアは、自分が声を出していることに気づいた。フ

レリスが怪訝そうな表情をしている。駆け抜けることにした。

「一番大切な人を苦しめるお願いなんて、絶対、押し付けられません。間違つて頼んだとしても、なしです、チャラです。そんなのは」

フレリスは立ち上がっていた。ティアを見下ろしている。迫る。手を伸ばす。吹き上げる何かを押さえつけるように、その手を振り下ろす。

「あんたは」

絞り出すように、フレリスはうめいた。

「私のこれまでを否定するわけ？」

「いえ、あの、ただ……私は」

ティアは振り上げられなかったはずの暴力に、苦痛の表情を見せた。

「フレリスさんは、こんな、つらい生き方をずっとずっと続けてきたんです。もう、十分すぎると思います。だって、」

言葉に詰まり、否定するようにかぶりを振って、うめくようにつぶやく。

「無理やり続けて……自分も、村もみんなも、なにより、その大切な人を、恨んでしまったら……それは、すごく……悲しすぎます」

フレリスはうつむく。なにも言わなかった。

日は高く登り、影は短くなっていく。庇の影は、壁に寄りかかる二人の爪先で断ち切られている。雑草を取り払ったときに掘り返された土の匂いが、いつしかずいぶん和らいで、風にまかれて揺れている。

ティアは空を見た。沈黙に困った末での行動だが、それを見つけたために、遡って、まるで呼ばれたかのように、空を見上げたのだ。つたという気がした。

「フレリスさん」

フレリスはティアを見て、視線を追って空を見上げる。澄み渡った空の薄く煙るような雲に、隠れるように小さな影が見えた。フレリスはそれを、鷹か何かだろう、と見破った。だが、ティアはそう

思わなかった。

「死んだ人は雲の上に行く、ということは知っていますか」

ティアの言葉の意図をつかみ損ねて、フレリスはティアの横顔を見た。ティアは嬉しそうな晴れがましい笑顔で、視線を返す。

「その人のことを素直な気持ちで思ったとき、姿を見せてくれるんです。フレリスさん。きっと、あなたを心配して、ずっと見ていたんだと思います。だって、なんにも知らない私でさえ、見えただすから」

「あれは、鷹でしょ。捕まえて見せましょうか？」

フレリスはティアを怪訝そうにうかがう。ティアは慌てて拒否を手振りで示した。

「いけません、そんなこと。彼らに弓引いたら、その人は畜生道に堕ちてしまいます。縁が途切れて、二度と巡り会えなくなってしまうんですよ」

「弓引けば、畜生に堕ちてその死骸が降ってくるわけ？ バカみたい」

「いけません」

笑うフレリスに、きっぱりとしたしなめる言葉を向ける。ティアは真剣な表情をしていた。

「たとえ信じられなくても、馬鹿馬鹿しく思えても、それを笑ってはいけません」

笑みは引っ込んだ。代わりに、呆れたような視線がティアに向けられる。

「それも、伝承の教え？」

「いえ、その。……弟が、そうしていたんです」

ティアは途端に勢いをなくして、うつむいた。

弟は数えきれないほどの伝承を学び、うちに含む不条理を発見していたが、決してそれを馬鹿にしなかった。己の正しさを誇りつつも、絶対視することを固く戒めている。間近で見てきたティアは、その態度に感銘を受け、同時に弟の指摘に理由もなく反駁する態度

に、強い反感を覚えていた。

フレリスは閉じていた口を、小さく開く。

「あなたは、それでいいの？ 私がいなくなれば、村を守れなくなるのに」

「本当は……困ります。でも」

ティアは言葉を探すように地面を見て、辺りを見渡した。ティアの手が入っていないところはひとつもなかった。

「私は、村を守るために必要だから、私が生け贄になることに同意しました。でも実際は、フレリスさんを生き長らえさせて、苦しみを引き延ばすための生け贄でしょう。村が守られるのは、そのオマケみたいなものです。私は、オマケのために私の命を投げ出すほど、自分を安く見ていません」

「……不思議なことを言う子ね、ホント」

フレリスは笑った。

「ねえ。最後、社の中の掃除、一緒にやりましょう？」

「いいですね。やりましょう」

それから二人ははたきで壁や梁の埃を落とし、床の埃を掃き出して、最後にすべてを磨きあげる。手を動かしていると、床が微かに軋む音が聞こえた。

「そういえばこの建物って、汚れのわりに、全然痛んでませんよね」

「まあ、建物自体は保護してあるからね」

さらりと言ったのけるが、ティアにはそれがどういった手段でなされているものか、見当もつかなかった。

「フレリスさん。この建物って、何なんですか？ フレリスさんの家じゃありませんよね」

「社は神様を祭る催事場。神様が訪れたときの仮住まいになるのよ。

……私の知っている伝承ではね」

「神様、ですか」

ティアは手を止めて、しばらく世話を続けた社を見上げる。

「なんの神様を祭ってらっしゃるのですか？」

「何も。ただ作ってあるだけ」

「そうですね……。なら、守り神がいついらっしやっても、大丈夫ですね」

フレリスは手を止めた。表情の薄いその目尻に、唐突に涙が浮かぶ。

「ああ、そつか。私、ずっと待ってたんだ」

ギョツとするティアの存在を忘れたかのように、フレリスは正体なく大粒の涙をこころごとこぼしていく。動き続ける手は、懸命に社を磨きあげる。

「私を、嫌な嫌な役目から、救ってもらえるときを。あの人が愛した村を、神様に託すときを」

「フレリスさん……」

ティアは、自分と比べ物にならないほど大きい存在であったはずのフレリスを、なによりも儚く感じた。まるで赤ん坊のような頼りなさだ。ティアはフレリスを抱き締めた。

「ずっとずっと、村を守ってくださって、ありがとうございました。村を代表して、お礼と敬愛を捧げます。私たちは、みんな、あなたが大好きです」

「ふ、う、ううう……っ」

フレリスはしゃくりあげながら泣いた。

「ねえ、ティア。あなたにお願いがあるの」

落ち着いたフレリスは、隣に座り込んでいるティアに声をかけた。ティアは慈しむような笑みで答える。

「为什么呢うか」

「私が死んだら、死体の血を、村を囲うように撒いてほしい。永久に続くわけじゃないけど、魔物避けになるはずよ」

ティアは顔色を失った。

「そんな、ダメです。亡骸はちゃんと弔わないと」

「そんなの、いらないわ。私が死んだら、あとの死体がどうなるう

と、もう関係ないもの。それなら、ちゃんと有効活用してもらえたほうが、まだ死に甲斐があるわ」

自分の言葉を裏付けるように、フレリスは穏やかに微笑んでいる。ティアは泣き出しそうな顔を伏せて、分かりました、とつぶやいた。フレリスは、うんとうなずいた。

そしてフレリスは死んだ。

ティアは弱った体を押してフレリスの死体を背負って村まで帰る。生け贄となったはずのティアが姿を現したとき、村人は驚き戸惑い、弟やレベツカを始めとした半分は喜んだが、残り半数は使命を果たさなかったティアに怒った。しかしティアはその怒りを受け入れた。正当な怒りだったからだ。ティアはまず長老に事の次第を仔細に語り、ついで村人全員に語った。守り神ではなかったという話を信じたものは少なかった。しかしティアは構わないと思っている。大切なのはティアが村人に信用されることではないのだ。ティアは黙ってフレリスの血を村の外縁に撒いた。そして、かつて聖域であった社とその参道が、荒れることのないように、生涯守り続けた。晩年彼女は、大巫女として尊敬されていく。

三百年後、村は滅んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7451w/>

ティア

2011年9月22日03時27分発行